



今月の題字
黒沢純平君
(船越小6年)

町のわだい

陸中山田ライオンズクラブ 義援金110万円を寄託 大津波被害の復興に役立てて

陸中山田ライオンズクラブ(佐藤葵会長)が、インド洋大津波の被災地を支援しようと義援金約110万円を日本赤十字社県支部山田町分区(分区長・沼崎喜一町長)に寄託しました。同クラブは3月5日、200以上の企業・団体の協賛によりチャリティショーを開催。入場料を義援金に充てたほか、会場でも募金を呼び掛けました。贈呈式は3月22日に役場で行われ、佐藤会長ら4人が訪問。佐藤会長が「被災地の復興に役立ててください」と沼崎町長に義援金を手渡しました。義援金は日赤を通じて被災地に送られます。



家族経営協定調印式



本町4組目の家族経営協定 明るく楽しい営農を誓う

本町4組目の「家族経営協定」の調印式が3月14日、役場で行われました。家族経営協定は、家族が農業経営の役割分担や就業条件などを文書で明確にし、経営の安定と発展を目指すもので、今回締結したのは荒川でシイタケ、水稲、野菜栽培を営む芳賀計市さん(61)、あつ子さん(54)、隆さん(26)、幸子さん(26)家族。調印式では、沼崎喜一町長、町農業委員会の武藤清吉会長、宮古農業改良普及センターの高橋定一所長らが見守る中、4人が協定書に調印しました。調印後、計市さんは「家族全員で協力し合い、明るく楽しい農業経営をしていきたい」と抱負を述べました。

マリン・ツーリズム山田設立総会 漁業と観光の連携に意欲

3月24日、「マリン・ツーリズム山田」の設立総会が役場3階大ホールで行われました。都市住民に漁業体験の機会を提供し、心と物の交流を図ることを目的に町内の漁業者5人と民宿、ホテル経営者2人で組織されたもので、設立総会には会員など20人が出席。会則や事業計画、予算などを決定し、会長に菊地和三さん(63歳)＝織笠＝を選出しました。菊地さんは「漁業と観光を連携させ、山田の素晴らしさをPRしていきたい」と活動に意欲を見せていました。



新製品開発の発表大会 本町の2社が金賞と銅賞

宮古・下閉伊地域の企業、団体、社員が新製品や作業効率の改善策を発表し合う生産革新・新製品開発発表大会(宮古・下閉伊モノづくりネットワーク工業部会主催)の新製品開発部門で、本町の川石水産が金賞、有限会社丸田屋が銅賞を受賞しました。川石水産が開発した商品は、ホタテの貝殻を皿にしたグラタンや、ホタテの貝柱を特製のたれで焼き上げた焼きホタテなどを詰め合わせた「ホタテ海童の贈物」。丸田屋の商品は、オリジナルの焼酎・純米吟醸と地元の海産物をふんだんに練り込んだラーメンを詰め合わせた「オランダ島山田ほろ酔いセット」です。商品の開発に携わった川石水産の川石睦代表と丸田屋の阿部喜美子さんは「山田の新鮮な食材を生かした新製品をさらに開発し、県内外にPRしていきたい」と話していました。



南極の氷で総合学習 自然の素晴らしさを実感

自衛隊宮古募集事務所(四戸常雄所長)が3月4日、総合学習の教材に役立ててもらおうと山田南小学校に南極の氷をプレゼントしました。この氷は、海上自衛隊の南極観測船「しらせ」が昨年持ち帰ったもので、大きさは約25平方角。授業に参加した5、6年生の児童95人は、四戸所長から南極について説明を受けた後、氷を触ったり、コップに氷を入れて数万年前に閉じ込められた気泡のはじける音を聞いたりするなど、自然の素晴らしさを実感していました。



海洋深層水セミナーに650人 水産業への利活用に熱い期待

3月21日、NPO法人日本海洋深層水協会(中島敏光代表理事)主催の第1回海洋深層水セミナーが町中央公民館を会場に開かれました。会場には、全国から会員や水産関係者ら650人が参加。寺崎誠東京大学海洋研究所教授などによる講演や、山田町をはじめとした市町村や研究者の事例発表が行われました。その後のパネル討論には沼崎喜一町長が参加し「この地域では深層水を利用した食品などの製品化は可能ですが、一番の目的である水産業への活用は、深層水が安価で大量に提供できる手段を探すことがこれからの課題」と述べました。海洋深層水は全国16カ所で取水され、活用されていますが、三陸沖は取水施設が無い「空白域」となっており、今後の利活用へ期待が高まっています。

